

1 subfigure パッケージを意地でも使わないゾ！

どの程度そのサブキャプションやらの機能を必要とするかで、実装が違ってくると思います。

個人的には、subfigure パッケージの機能は、(コードを見れば、「なんだか長いなー」と思うので、) 大抵の利用状況で subfigure を読み込むまで必要ないと思います。

subfigure やら subcaption やらで、「別途カウンターを定義して、ふがふが、」という処理はいくらでも書けますけれども、実際は、ここで定義した `\sublabel` コマンドの機能程度を使いこなすだけで、期待する出力および機能は十分にみたされないでしょうか？

こんなふうに記述します。



(a) 虎一郎



(b) 虎次郎



(b) 虎三郎

図1 虎虎三兄弟

このように書いておくと、図1の参照はいつもどおりですが、図1(a)や図1(c)も簡単に参照できて、期待した参照の出力を得られていると思います。

また、ここで定義した `\sublabel` コマンドだと、出力に潰しがききます。同一文章で (i), (ii), (iii) のような図の部分番号が (普通の人が書く論文では、統一されているはずだと思うのですが、実際に、現場で学会誌なんかを組版していると、(a) とつかったり、(i) をつかったりとめちやめちなことがあって、そういう場合に subfigure コマンドだったり、subcaption コマンドだったりなんか、使っていたら、面倒臭すぎてしかたないし、学术论文の組版は、1つの記事だけで終わっちゃうので、たいして汎用性なんか持たせるよりも、効率的な手抜きをしつつ、生産性とマークアップを最大限に効果を上げる必要があると思うので、) 混ざっている場合でも、以下のように記述ができて、全く同一に利用できます。

このように書いておくと、図2の参照はいつもどおりですが、図2(ii)や図2(iii)も簡単に参照できて、期待した参照の出力を得られていると思います。

当たり前ですが、途中で図1つだけあっても、以下のように普通に記述できます。

以上であれば、標準的な L^AT_EX 2_ε からほとんど汚さずに、お手軽に図の子にキャプションやラベルも与えられると思います。

以上はあくまでも個人的な見解です。



(i) 虎四郎



(ii) 虎五郎



(iii) 虎六郎

図2 別の虎虎三兄弟



図3 六兄弟を生んだお父さん虎